

バングラデシュの聴覚障害者が置かれている現状

—農村地域における聴覚障害者の孤立に着目して—

平成 25 年入学

派遣先国：バングラデシュ

山中 奈奈美

キーワード：バングラデシュ，障害者，聴覚障害者，手話，NGO

対象とする問題の概要

アジア最貧国といわれるバングラデシュでは多くの障害者が物乞いをしているが、外見上は健常者と何ら変わりのない聴覚障害者に限っては自分の障害を訴えて物乞いをする事が出来ない。日本や西欧などの先進国とは異なり、社会保障が圧倒的に不十分な発展途上国で障害を負いながら自ら生計を立てて生きなければならない状況はより一層深刻さを増す。そうした中、近年のバングラデシュでは、現政権が 2008 年から政策マニフェストに障害者支援を掲げ始め、2009 年からニュース番組において手話通訳がつくようになったり、2010 年には障害者支援を行う現地 NGO が、新しい支援の展開方法が評価されアジアのノーベル賞と呼ばれるマグサイサイ賞を受賞したり、聴覚障害者支援に新たな動きが見られている。しかしながら、聴覚障害者が持つ障害の本質はコミュニケーション障害や情報障害といった二次的な障害であるため、彼らにとって根本的な解決になっているとは言い難い。

研究目的

本研究の目的は、まずもってバングラデシュにおける聴覚障害者が置かれている現状を明らかにすることである。特に農村地域の聴覚障害者の孤立問題に着目し、多様な観点からその現状を描き出す。具体的には、まずバングラデシュにおける障害や障害者の捉えられ方、聴覚障害者の位置づけ、イスラーム思想における障害者の位置づけなどから、バングラデシュの人びとの認識や理解を調査していく。次に、ろう学校や手話、NGO といった観点から捉え、また、聴覚障害者の周囲とのコミュニケーション方法、彼らが抱えている問題などを調査する。障害者に関する研究や実践では上記に挙げたような支援や政策などの面に焦点が当てられることが多いものの、二次的な障害を考慮しながらコミュニティ論やコミュニケーション論といった切り口から描き出すことを試みたい。さらに、バングラデシュ社会の変容を捉えながら聴覚障害者が抱える問題の解決策の考察も試みる。

フィールドワークから得られた知見について

今回の調査では、都市と農村地域をあわせて、障害者支援 NGO 2 団体、ろう学校 5 校、聴覚障害者宅 10 軒を中心に訪問し、それぞれインタビュー調査と参与観察を行った。調査内容は、聴覚障害者の定義や捉えられ方、手話の普及程度、ろう学校の状況、家族間のコミュニケーション、NGO の取り組み、聴覚障害者の性格・生計・結婚事情・環境・悩み・人間関係・社会問題など多岐に渡った。その中でもここでは、筆者も少しばかり習得したバングラデシュ手話に関することを取り上げたい。バングラデシュでは未だ手話が普及していないが、その確立に向けて近年、約 4,200 語を収録したバングラデシ

手話のテキストを作成した現地 NGO の CDD (Center for Disability in Development) が、現在も手話の普及活動に励んでいた (写真1)。私が訪問した農村地域のろう学校の教員も CDD のトレーニングを 50 日間受けており、そこで習得した手話を更に生徒が学ぶ様子を見て、着実に普及している様子を垣間見ることが出来た。



写真1 5 日間に渡り、普通学級の教員に向けた聴覚障害や手話に関するセミナー&トレーニングを行っている様子



写真2 農村地域の非政府系ろう学校の生徒たちと

とは言え、バングラデシュは他国の手話が多く入り混じっている。バングラデシュの手話は、イギリスの植民地であった影響で、イギリス手話に基礎をおくとされているが、利便性からアメリカ手話を使う者 (写真3) やミッション系の団体が開設する寺小屋でアメリカ手話を習得する者、留学先で習得したオーストラリア手話やフィンランド手話を使う者などさまざまである。

バングラデシュの聴覚障害者の多くが、家族とのコミュニケーションでは”local sign”を用いると答えた。これは家族間で自然発生的に創られたオリジナルなサインを用いてなされる伝達方法で、文法など規則性を持ち合わせていない場合がほとんどである。筆者がインタビューした聴覚障害者の母親は、local sign での感情や意思などの伝達や共有は困難を



写真4 健聴者の兄弟と local sign で会話する聴覚障害者の女生徒

極めると話していた。また、親とのやりとりの中ではあまり使われていないが、兄弟間では local sign を頻繁に使っているように見受けられた (写真4)。



写真3 A~Z までのアルファベットを表す場合、両手を使うイギリス手話に対し、アメリカ手話は片手しか用いない。実際に、筆者が出会ったバングラデシュの聴覚障害者の Dipu 氏は聴覚障害者の友人と携帯でやり取りする際に、メールを打つのではなく、携帯に内蔵されたカメラで手話の動画を撮ってやり取りをしていた。その際に、片手で携帯のカメラを自分に向けて持っていて手話ができるのは片手しかないため、アメリカ手話の方が便利だという。



写真5 NGOのスタッフ（健聴者）と都市の政府系ろう学校に通う女子生徒が Bangladesh 手話で会話する様子



写真6 農村地域のろう学校に通う男子学生が、描いた絵を筆者にくれた。絵が得意であったり、画家を目指す聴覚障害者は多い。

今後の展開・反省点

今回の調査での主な反省点は、イスラーム教の行事等を考慮せずに渡航時期を選定したことや事前に現地語の習得をしていなかったことである。この報告書では、手話の観点から読み取れた現状について特筆したが、今回の調査で、手話を使えなかったり、ろう学校に通ったことがなく周囲から孤立している聴覚障害者にも多く出会った。深い悲しみや怒りを家族とさえ共有することが困難な状況である様子も実際に目の当たりにして、聴覚障害者の抱える根深い問題を今一度思い知り、研究目的で述べた筆者の研究の視座でこれからも研究に臨むことを改めて心に決めた。今後しばらくは、今回のフィールドワークで得られたデータを整理・分析し、次の渡航に向けて文献調査に励み、Bangladesh の聴覚障害者の孤立問題について多角的に考察していきたい。そして繰り返しになるが、将来的には聴覚障害者が抱える問題の根本的な解決策を提示していきたいらと考えている。



写真7 インタビューをさせていただいた聴覚障害者の Rexoma さん一家